

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Studio考
Author(s)	西村, 政人
Citation	ニダバ , 28 : 19 - 27
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048042">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048042</a>
Right	
Relation	



## Stùdio 考

西村 政人

## 0. はじめに

ボッカッチョの『フィロストラト』に stùdio という語が使われてる。池田廉他著『伊和中辞典』（小学館、1990）では、①勉強②研究③書齋④学科⑤試案⑥エチュード⑦勤勉⑧希望⑨職業という意味が主に与えられている。現在では当然最初に示された意味で使うことがほとんどである。『フィロストラト』では②で示された意味で使われている。しかし、『デカメロン』では⑦の意味で使われている例がある。また、『トロイラスとクリセイデ』をはじめるとするチョーサーの作品でも stùdio にあたる studie という語が使われていて、「熱意、好み」の意味で使われている。

そこで本稿の目的は、イタリア語の stùdio に焦点を当て、ラテン語の作品も考慮に入れて、『フィロストラト』『デカメロン』と『新曲』の中でどのような意味で使われているかを明らかにし、この語の変遷をたどることにある。

## 1. Stùdio の語源とその概念について

Stùdio の語源はラテン語の studium にさかのぼる。この名詞は動詞 studeo から派生したものである。名詞の主な意味は田中秀央著『羅和辞典』（研究社、1985）には、①熱心な努力②専心③偏愛④仕事⑤道楽⑥勉強、研究⑦研究室が挙げられている。もとの動詞の意味は「得ようと努める」の意味である。ここでは stùdio の語源とその概念についてさらに詳細に述べてみたい。筆者が調べた限り、この語についてはふたつの語源説がある。ひとつは、ギリシア語  $\sigma\alpha\omicron\nu\delta\acute{\eta}$  に起源を求めている辞書がある。たとえば、*A Dictionary of the Latin Language* である。この辞書は1835年の出版であり、この語の語源について多分ギリシャ語の  $\sigma\alpha\omicron\nu\delta\acute{\eta}$  から来ていると記述している。この語は「急ぎ」という意味である。同じく *A Latin Dictionary Lewis and Short* が、多分ギリシャ語の  $\sigma\alpha\omicron\nu\delta\acute{\eta}$  と同種と述べている。もうひとつはラテン語の tvndo にその起源を求める辞書である。*Oxford Latin Dictionary* は、studium の動詞形 studeo の箇所が多分ラテン語の tvndo と関連があると述べている。この語は「押す、突く、打つ」という意味である。*Lateinisches Etymologisches*

Wörterbuch もこの説をのべている。この辞書はギリシャ語の  $\sigma\alpha\omicron\nu\delta\eta$  の説には否定的だが、これを主張する研究者も列挙している。どちらが説得力があるのか筆者には容易に断定はできない。しかし、新しい見解ということなればラテン語 *tvndo* 説ということになる。

ではこの *stúdio* という語の概念はどのようなものであったのか。イタリア語およびラテン語の用例から判断すると、「人間の心からの要求と人間の努力」という概念であると言える。この語については、キケロが *De Inventione* <sup>(1)</sup> の中で次のように定義している。

*Studium est autem animi assidua et vehementer ad aliquam rem applicata magna cum voluptate occupatio, ut philosophiae, poëticae, geometricae, litterarum.*

(Interest is unremitting mental activity ardently devoted to some subject and accompanied by intense pleasure, for example interest in philosophy, poetry, geometry, literature.) (I, 25, 36)

キケロの定義によると、それは具体的に哲学、詩学、地理、文学への途切れることのない興味ということである。

## 2. ボエティウス『哲学の慰め』に現れる *studium*

ではこの語が具体的にどの意味で使われてきたかをまずラテン語の作品で見てみる。扱う作品はボエティウスの『哲学の慰め』である。この作品を選択した理由は、チョーサーがこの作品を翻訳をしており、今後の比較研究の貴重な資料となりえること、この作品が中世ヨーロッパで広く読まれ、ダンテにも影響を与えていることである。

ボエティウスの『哲学の慰め』に現れる *studium* の用例<sup>(2)</sup>を見てみる。括弧内は原文の英訳であるが、最後の *studium* の訳は訳文には表されていない。

<i>studio</i> (content)	(Book I I 1)
<i>studiis</i> (thought)	(Book I I 38)
<i>studiis</i> (pursuits)	(Book I III 36)
<i>studium</i> (purposes)	(Book I IV 30)
<i>studium</i> (zealously)	(Book I IV 132)
<i>studiorum</i> (pursuits)	(Book III II 3)

studia (endeavours)	(Book III II 51)
studiis (endeavours)	(Book III II 77)
studio (kindliness)	(Book III II 20)
studiis (pursuits)	(Book IV II 7)
studia (pursuits)	(Book IV III 64)
studium (turn aside)	(Book IV IV 103)

今挙げた用例では「研究、学問」という意味で使われているのは Book II 38 の例のみである。残りは「努力、熱意、何かを求めること」の意味で使われている。なお、studiosi, studere も使われているので、用例を挙げておく。<sup>(3)</sup> これらは「探求する人」「探求する」の意味で使われている。

beatas fore res publicas, si eas vel studiosi  
sapientiae regerent vel earum rectores  
studere sapientiae contigisset.

(that those states would be happy where philosophers were  
kings or their governors were philosophers.<sup>a</sup> (ママ) )

(Book I IV 32)

### 3. 『新曲』における stùdio

イタリア語の語彙の変遷を考える時、ダンテの作品を避けることはできない。『新曲』に出現した stùdio をコンコーダンスを使って調べると4例現れるだけである。

vagliami 'l lungo studio e 'l grande amore  
(Inferno I 83)

che sono in voi, sí come studio in ape  
(Purgatorio XVII 58)

<<che studio di ben far grazia rinverda>> .  
(Purgatorio XVII 105)

L'una vegghiava a studio de la culla,  
(Paradiso XV 121)

これらはそれぞれ、「没頭すること」「衝動的行為」、残り2例は「打ち込むこと」の意味で用いられている。「衝動的行為」<sup>(4)</sup> という意味はこの作品独自の用例である。これは、人間でなく、動物—ミツバチの性質を表すの使われている。『新曲』は長編であるに

もかわらず、stùdio の用例は少なく、意味も限られていたと言える。

次に studiare, studioso の用例を挙げる。最初の2例は「を調べる」「を学ぶこと」の意味である。Studioso はダンテ特有の意味で「獲物を探す」<sup>(5)</sup> という独自の意味で用いられている。ここも、人間でなく犬の性質を表すの使われている。

non v'arrestate, ma studiate il passo,  
(Purgatorio XXVII 62)

si studia, sí che pare a' lor vivagni.  
(Paradiso IX 135)

Con cagne magre, studiose e conte  
(Inferno XXXIII 31)

#### 4. 『デカメロン』における stùdio

ここでは、フィロストラト以外にボッカッチョの代表作『デカメロン』に現れた stùdio を調査してみる。用例は15例あり、それをまとめたものが以下の結果である。

che egli faceva agli studi	(II 10 5)
lo studio delle leggi	(II 10 32)
il loro studio hanno posto	(III 7 36)
cosa tanto studio	(IV In 12)
con ogni studio seguitando,	(IV 3 21)
ed ogni studio ponevano	(IV 3 25)
e continuo studio	(IV 5 19)
con tutto il suo studio	(VII 5 7)
dopo lungo studio	(IX 7 13)
con ogni studio cercare	(IX C 5)
Essi avevano cominciati gli studi,	(X 8 8)
il viso mio e gli studi,	(X 8 66)
d'imperio e di studi	(X 8 67)
se non di studi commendare.	(X 8 67)
che hanno negli studii	

(Conclusionone dell'Autore 21)

筆者が調査した用例を意味に従って分類すると、「勉強」の意味で用いられたもの3例、「学問、研究」5例、「世話」7例である。ここで明らかに、ボッカッチョになって stùdio

を「学問、研究」として使われる兆しがでてきたと言える。次に *studiare* の用例を意味に従って分類して挙げる。

A. 熱心に何かをする

e forte vi studiava, (I 1 12)  
sommamente avere studiato di compiacere (IV In 34)  
la cosa in che studiava (IV 8 4)  
che voi studiaste là in medicine, (VIII 9 65)  
a me pare che voi studiaste (VIII 9 65)  
e sì a questo fatto si studiava, (IX 8 26)

B. 勉強する、研究する

avendo lungamente studiato a Parigi, (VIII 7 5)  
egli studiò in medicine, (X 2 13)  
sempre proceduti simao studiando (X 8 66)  
voi non va a studiare

(Conclusione dell'Autore 21)

C. 急ぐ<sup>(6)</sup>

non ciamo sì saputi studiare, (IX 6 9)

用例は10例である。もとの「熱心に何かをする」の意味に加えて、「勉強する」という意味での用法が芽生えてきているといえる。次に副詞の *studiosamente* の用例を挙げる。

A. 熱心に

Parmeno studiosamente aver dato (I, In 104)  
studiosamente faceva, (III 2 7)

B. わざと、わざわざ<sup>(7)</sup>

quasi come se studiosamente (IV 1 17)  
le quali egli studiosamente (X 2 15)

副詞の場合はもっぱら「熱心に」という意味が残っている。Bに示した2例は特別な意味で使われている。最後に形容詞 *studioso* が名詞化されて「学生」という意味で使われた用例が2例ある。

molto meglio agli studenti,  
(Conclusione dell'Autore 21)  
si conviene nelle scuole tra gli studenti (X 6 3)

## 5. 『フィロストラト』における stùdio

『フィロストラト』では stùdio は1例使われているだけである。「学問」という意味で使われている。studare, studioso も1例、2例ずつ使われているだけである。それぞれ「強く促す」「親切な」「熱心な」の意味である。<sup>(8)</sup>

di Pallade gli studi, e le predezze 3-88(3)

Pandaro che da Troiolo sovente  
era studiato, a Criseida reddio, 2-118(2)

Pandar, sì come amico studioso, 3-22(3)

e s'io vedessi il modo d'ammendare,  
abbi per certo, io sarei studioso: 8-24(5)

## 6. 考察

ここではこれまでの調査をもとに考察を行う。stùdio の語源については説がふたつあり、どれとは決定しがたい。ラテン語 tvndo にその起源を求める説が最新のものである。しかし、ギリシャ語の  $\sigma\alpha\omicron\nu\delta\eta$  説も否定しきれない。そしてこの語の概念は、キケロが述べているように「人文学、具体的には哲学、地理、文学への興味」であった。これらを知りたいという気持ちが努力となり、これらを含む意味で「研究、学問」の意味が出てきたと考えられる。

ボエティウスの『哲学の慰め』の用例では、「研究、学問」の意味で現れる用例は1例しかない。この作品ではもっぱら「何かを求めること、努力、熱意」の意味で使われている。辞書の記述は studium に「研究、学問」の意味が与えられているが、今回の調査ではこの意味での使用頻度は高くない。

ダンテの『新曲』では用例が少ない。しかし、stùdio は「何かに打ち込むこと」の意で使われていて、「研究、学問」の意味の用例はない。ボッカッチョの『デカメロン』『フィロストラト』でも用例は15例、1例と多くはない。ただ、ボッカッチョのこれらの作品には、stùdio が「研究、学問」の意味で使われ始めている。このことは動詞 studiare にも当てはまる。また、『デカメロン』では形容詞は名詞化して「学生」の意味で使われている。形容詞については、ダンテが studioso を人間でなく動物の性質を表すの使っているのは興味深い。副詞は、『新曲』には現れない。ボッカッチョは「熱心な」と「わざと」の意味で使っている。ボッカッチョが動詞と副詞に「急ぐ」「わざと」という意味を持たせているのは、stùdio のもとの概念「心の活動」ということを考えれば、理解できる意味である。

ここで、現代の英語、イタリア語、ドイツ語、フランス語に目を向けてみる。今回の調査結果を踏まえ一般言語学の観点から、以下のようにまとめてみると、ドイツ語は形容詞、副詞を欠いている点が興味深い。

	動詞	名詞	形容詞	副詞
英語	study	study	studious	studiously
ドイツ語	studieren	Studium	*	*
フランス語	étudier	étude	studieux	studieusement
イタリア語	studiare	stùdio	studióso	studiósa- mènte

## 7. むすび

Stùdio について通時的に考察を進めてきた。現在の「研究、学問」の意味に至るまでは、具体的なもの（哲学、地理、文学）への興味から出発していたことが明らかになった。「何かを得ようすること」「しようと努める」の意味は、辞書には英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語の名詞および動詞の項目で記述されている。しかし、現在では用いられない。英語の名詞 study については、brown study「夢想、熟考」という表現に、もとの意味「何かに打ち込むこと、熱心」が残っている。本研究をもとに、今後はチョーサーの作品における studie を考察していく。

## 注

\*本稿作成にあたり、前田弘隆氏より助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(1) Cicero. *De Inventione, De Optimo Genere, Oratorum, Topica*. With an English Translation by H.M. Hubbell. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts, London: Harvard University Press and William Heinemann Ltd. 1976. 72-75.

(2) 本稿での作品からの引用は、最後に示したテキスト一覧に示したものから行数を示し引用を行っている。本稿における作品の引用はこの一覧表に掲載した原典からと理解していただきたい。

(3) Boethius. *Tracatates, De Consolatione Philosophiae*. With an English Translation by H.F. Stewart, D.D. and



E.K.Rand, and E.k. Rand and S.J. Tester. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press and William Heinemann Ltd. 1978. 146-147.

- (4) Giorgio Siebzeher-Vivanti. *Dizionario della Divina Commedia*. A cura de Michele Messina. Milano: Feltrinelli. 1989. 622.
- (5) 同上。
- (6) Boccaccio Giovanni. *Il Decameron*. A cura di Carlo Salinari. Roma-Bari: Editori Laterza, 1986. 657.
- (7) 同上、291, 686.
- (8) Boccaccio Giovanni. *Filostrato*. A cura di Luigi Surdich. Milano: Mursia. 1990. 158, 181, 415.

#### テキスト

- Alighieri, Dante. *La Divina Commedia*. A cura di Natalino Sapegno. 3 vols. Firenze: <<La Nuova Italia>> Editrice, 1968.
- Boethius. *Tracatates, De Consolatione Philosophiae*. With an English Translation by H.F. Stewart, D.D. and E.K.Rand, and S.J. Tester. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press and William Heinemann Ltd. 1978.
- Giovanni, Boccaccio. *Caccia di Diana·Filostrato*. A cura di Vittore Branca. Milano: Arnoldo Mondadori Editore S.p.A., 1990.
- Giovanni, Boccaccio. *Il Decameron*. A cura di Carlo Salinari. Roma-Bari: Editori Laterza, 1986.

#### 引用文献

- Balbina, Alfredo. *Concordanze del "Decameron."* A cura di Alfred Balbina. Sotto la direzione di Umberto Bosco. 2 vols. Firenze: Giunti, 1969.
- Cicero. *De Inventione, De Optimo Genere Oratorum, Topica*. With an English Translation by H.M. Hubbeell. Loeb Classical

- Library. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press and William Heinemann Ltd. 1976.
- Giovanni, Boccaccio. *Caccia di Diana, Filostrato*. A cura di Vittore Branca. Milano: Arnoldo Mondadori Editore. 1990.
- Giovanni, Boccaccio. *Filostrato*. A cura di Luigi Surdich, con la collaborazione di Elena D'Anzieri e Federica Ferro. Milano: Mursia. 1990.
- Glare, P.G.W. ed. *Oxford Latin Dictionary*. Edited by P.G.W. Glare. Oxford: At the Clarendon Press. 1982.
- Lewis, Charlton and Short, Charles. *A Latin Dictionary*. Founded on Andrews' Edition of Freund's Latin Dictionary. Revised, enlarged, and in great part rewritten by Charlton T. Lewis, PH.D. and Charles Short, LL.D. Oxford: At the Clarendon Press. 1969.
- Scheller, I.J.G.. *A Dictionary of the Latin Language*. Originally compiled and illustrated with explanations in German by I.J.G. Scheller. Revised and translated into English by J.E. Hiddle, M.A. Oxford: At the University Press. 1835.
- Siebzehner-Vivanti, Giorgio. *Dizionario della Divina Commedia*. A cura de Michele Messina. Milano: Feltrinelli. 1989.
- Walde, A. and Hofmann, J.B. *Lateinischces Etymologisches Wörterbuch*. Fünfte Auflage. Heidelberg: Carl Winter•Universitätsverlag. 1982.
- Wilkins, Ernest Hatch and Bergin, Thomas Goddard. *A Concordance to the Divine Comedy of Dante Alighieri*. Edited for the Dante Society of America by Ernest Hatch Wilkins and Thomas Goddard Bergin. Associate editor: Anthony J. De Vito. 2 vols. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press. 1965.
- 池田廉他 『伊和中辞典』 東京、小学館、1990。
- 田中秀央 『羅和辞典』 東京、研究社、1985。